

よみさんぽ

大宮見沼



第14号

写真家 野口勝宏

やどかりの里発！ 地域発見マガジン

特集

「地域で安心して暮らしたい」を実現するために
やどかりの里大バザーが目指すこと

編集 公益社団法人やどかりの里「大宮見沼よみさんぽ」編集委員会

特集

「地域で安心して暮らし やどかりの里大バ

障害のある人が地域で安心して暮らすために

今年（2015年）も10月11日（日）に中川自治会ふれあい広場にて、やどかりの里大バザーを開催します。例年、たくさんの地域の方々が来場され賑わいを見せており、毎年の恒例行事となっています。

1970（昭和45）年に活動を開始したやどかりの里が、初めてバザーを行ったのは1975（昭和50）年。当時の日本では、精神障害のある人は障害者福祉の対象ではなく、地域で支えていくための法制度も整っていませんでした。「地域で安心して暮らしたい」という障害のある人たちの願いを実現するためには、新たな事業の展開と、そのための自己資金獲得が必要でした。そこで、バザーを開始するのが始まりです。現在でも、新たな事業を立ち上げるためには、その一部に自己資金が必要です。バザーの収益を活動資金に充て、これまでも法人全体で事業の立ち上げを応援してきました。



当初のバザーの様子

たい」を実現するために ザーが目指すこと

地域の人たちに支えられてきたバザー

資金を集めることだけがバザーの目的ではありません。バザーを通じた地域の方々との交流は、新たな出会いにもつながり、やどかりの里の活動を知っていただく貴重な行事となっています。

バザーでは出品するための寄贈品が必要であり、ここ数年で毎年200件ほどの寄付を頂いています。バザー当日には、日頃からやどかりの里と関わりのある地域の方、大学のゼミナールや高校のクラブ活動の一環としてご協力くださる学生、近隣にお住まいの方々など、合わせて100名ほどのボランティアが集まり、バザーを盛り上げてくれます。また、バザー開場前のお客さんによる長蛇の列も、近年見慣れた光景です。

バザーの物品を寄贈してくださる皆さん、当日お手伝いしてくださる皆さん、会場に遊びにきてくださる皆さん、その他多くの方のご協力で、やどかりの里



近年のバザー

のバザーは行われてきました。

バザーの収益を活用した取り組み

地域の皆さんに支えられ、40年に渡り続けてきたやどかりの里大バザー。バザーで得た収益は、近年、障害のある人の働く場と暮らしを支えるための事業の拡大に活用させて頂きました。

約20年前から、地域に住む高齢者や障害のある人へ弁当の配食サービスを行っている「エンジュ」では、精神障害のある人たちが働いています。しかし、働く人たちが増え、手狭になったことから、2013（平成25）年、新たな拠点となる見沼区南中野に移転しました。現在では、70名もの障害のある人の「働きたい」という願いを叶えることができるようになりました。また、最大で約300食のお弁当を生産できるようになり、管理栄養士のカロリー計算のもと、栄養バランスのとれた美味しい食事を、より多くの地域の方にお届けすることができるようになりました。

見沼区中川にある「サポートステーションやどかり」は、精神科病院に入院していた人が、地域で安心して暮らすための準備をする場所となっています。しかし、このような機能をもつ施設は、さいたま市内でもこの1か所しかなく、定員も限られており、利用希望があっても受け入れが困難となっていました。そのため、1人でも多くの人が精神科病院を退院して地域で暮ら



移転したエンジュ



移転前のエンジュ

せるよう、2013年に建物を改修し部屋数の増大を図り、より多くの受け入れができるようになりました。

「エンジュ」「サポートステーションやどかり」の移転と改修の費用には、合わせて約5,000万円の自己資金が必要でした。そこで、2010（平成22）年から2013年までの間で資金獲得を目指しました。その一部にバザーの収益金を充てることで、無事に目標を達成。障害のある人たちの「地域で安心して暮らしたい」という願いの実現につなげることができました。

これからやどかりの里が目指すもの

今年4月からは「農業と福祉の連携」を目指し、障害のある人の新たな働く場づくりとして、農業活動も始めました。今年のバザーの収益金をこの活動に充てさせていただき、事業の維持・拡大とともに、地域おこしの助力になれるよう取り組んでいきたいと思えます。

今年10月11日（日）、中川自治会のご協力により中川ふれあい広場にてやどかりの里大バザーが開催されます。楽しいイベントや模擬店も企画しています。秋の1日をいっしょに楽しみませんか？やどかりの里一同、地域の皆様のご来場を楽しみにお待ちしております。（記 齊木 辰雄、関口 和司）

やどかりの里大バザー

2015年10月11日（日）

10：00～15：00

会場 中川自治会ふれあい広場（さいたま市見沼区中川703）



農業への挑戦も始めています

やどかりの里の仲間たち・13

人と人がつながる場所

鴻巣 ^{たいじ} 泰治さん



やどかりの里の活動を維持し、新しい拠点や施設建設のための資金づくりとして欠かせないのが、毎年10月に行われるやどかりの里大バザーだ。

バザーで売る品は地域の方や関係機関からの寄贈品である。寄贈品は1点1点仕分けし、値付けする作業から始まる。仕分けを終えた段ボールには「外」「内」そして「鴻巣」という印がつく。贈答用のセット物は「内」これは以前、中川自治会館の中で良品を売っていた時代の名残である。「外」はグラウンドで売る雑貨など幅広の品々だ。そして「鴻巣」である。これは外売り雑貨の中でも、特段値段をつけにくいものを指している。それを販売するのは至難の業。しかし、今回ご紹介する鴻巣泰治さんの手腕にかかれば瞬く間に売れてしまう。

「私は1990（平成2）年に大宮保健所に赴任し、やどかりの里に関わり始めました。県職員の私が直接お手伝いすることは限られていましたが、バザーの助っ人ならと長くボランティアとしてお手伝いを続けています。今では中川地区の風物詩となっているバザーは、地域の方とボランティア、利用者や関係者、職員が一体となって行われており、心のバリアフリーが目の前にあるのです。最近では高校生がボランティアに入ったり、模擬店の種類が多くなったりすることに新鮮さを感じつつ、毎年バザーでいっしょに作業される方、毎年来場されるお客様とお会いできることが楽しみになっています。商品を媒体に使い方をいっしょに考えたり、説明したり、会話する中で人と人がつながる場所がやどかりの里バザーになっています。地域の方にとってもやどかりの里にとっても、重要なイベントとしてこれからも続いていくことを期待します」

グラウンドで声を張り上げ販売する男性がいたら、それは鴻巣さんかもしれない。商品を片手に、会話を楽しんでみてはいかがだろうか。（記 浅見 典子）

よみさんぽ 日誌

北浦和とサツマイモ

さいたま市北浦和が発祥のサツマイモがあることをご存知でしょうか。その色の鮮やかさから後に「紅赤」と名付けられたサツマイモは、明治31年（1898年）に木崎村（現在の北浦和）の主婦山田いちの畑で、突然変異のサツマイモとして発見されました。別名金時イモとも呼ばれるとおり、皮は紅色、中は黄色で、ホクホクとして味も良く、当時の市場でも高値で売れたそうです。

いちはその苗を大切に育て、決して独り占めせず、苗を欲しいという人には親切に分け与えたといえます。そして、昭和の始め頃には埼玉のサツマイモの作付面積の9割までが紅赤になるほどでしたが、新しい品種が普及するにつれ、手間がかかり収穫量も少ない紅赤はいつしか姿を消していきました。今では主な生産地は川越地方の三芳町に移り、紅赤が北浦和生まれのサツマイモであることを知っている人は少なくなりました。

発見から110年以上を経て、紅赤がさいたま市発祥のサツマイモであることを知ってもらおうという取り組みが少しずつ始まりました。市内の生産者による研究会も発足して、紅赤を焼酎として加工したり、菓子店や福祉作業所が紅赤を使った饅頭やプリン・クッキーなどのバラエティ豊かなレシピを考案し、さいたま市の新しい名産品としてPRしています。また、紅赤発見の地に近い北浦和図書館にはサツマイモの本を集めたコーナーがあり、毎年焼き芋などのイベントを行って地域に向けて情報発信をしています。山田いちのお墓のあるかくしんじ廓信寺には、紅赤の由来を記した案内板も設置されています。

紅赤は焼き芋や天ぷらにするのが特においしいほか、お正月のきんとんに使えば素晴らしい発色をするため料理店などで使われるそうです。苗を分け合うことから始まった地域の宝物をたくさんの人に知ってもらい、これからも大切に伝えていけたらと願っています。（記 山田 玲子）



ご存知ですか？ あなたの街のやどかりさん

公益社団法人やどかりの里は精神障害のある人たちの、地域での生活を支える活動を続けています。現在、さいたま市見沼区、大宮区、浦和区、中央区に、支援センターや働く場などの事業所があります。

X-11 便面を連や
軽作業 ほど行ってます



あゆみ舎



ミナトスモ
手洗い

喫茶「ルポーズ」

大宮区障害者
生活支援センター



県産小麦を使った
おまんじゅう



まごころ

野菜たっぷり
お弁当



喫茶店とか
弁当屋とか
やるんだ



浦和区障害者
生活支援センター

精神障害のある人たちが
自分にあった「P-2」
働いています。

社会の中で住む場を持ち、成長と共に殻(家)を大きくしていけるように「やどかり」に願いを込め、活動を始めた「七里」に由来します。

海老島(埼玉)をなせ? やどかり

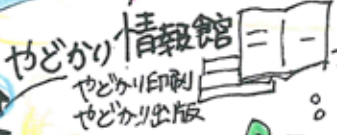


東部活動支援センター
見沼区障害者生活支援センター

すてあず



リサイクル品販売とオリジナル品製作(皮、布製品) 販売



やどかり情報館
やどかり印刷
やどかり出版

本居作にちか



農業に挑戦中!

インシ 年当宅配の仕事をしています



1人暮らしの練習や様々な活動にとりくんでいます



サポーターステーションやどかり
法人本部

障害者生活支援センターでは障害のある人やご家族が困っていることなどに相談を受け一緒に考えます。

活動支援センターって? 障害のある仲間同士気兼ねなく集い、様々な活動も行っています。



グループホームは... 一般のパートを借りる形でご対応しています。

浦和活動支援センター



やどかりの里と私

土橋 敏孝さん

(やどかりの里代表理事)



福祉という原点

やどかりの里は今年（2015年）活動45周年を迎えました。長くその活動を応援し、現在はやどかりの里代表理事を務める土橋敏孝さん。土橋さんのこれまでの歩みとやどかりの里の活動を重ね、入職5年目、2年目の職員がお話を伺いました。

土橋さんは1941（昭和16）年、東京都大田区に生まれ、現在74歳。4歳の時に終戦をむかえ、空襲で周囲の家が焼失する中、何とか家族で生活されていたと振り返ります。

「両親と弟の4人暮らして、途中家の事情で住まいを転々と移しながら、最終的には札幌で小学校の卒業式を迎えました。その間、一時期弟と2人で児童養護施設にいたので、だから人の世話になったなと思いつつ、保母さんの『あなたたちは他の人とは違うんだよ』という言葉には、子どもながらに傷ついたもの

です。どこが他の人と違うのか、違うなりの別の生活補償がされていいんじゃないかという気持ちもありました」

忘れられない姿

土橋さんはその後、中学から東京へ戻り、高校・大学と明治学院に進学することになりました。

「福祉にお世話になったので、私も福祉現場でお返しができたらと、大学では社会学科に入りました。

社会は日米安全保障問題等騒然としている時でした。4年生時の重田ゼミでは、谷中輝雄さん（やどかりの里前理事長）と出会いました。

クラブ活動の時、後輩を病院に入院させるべく連れて行ったことがありました。東京から2時間以上かけて、後輩を鍵のかかる部屋に預けて帰る時の虚しさ……未だに忘れません。実はその病院に後に来られたのが谷中さんでした。

私は、大学卒業後埼玉県社会福祉協議会に入職、谷中さんは鉄道弘済会社会福祉部計画課に入り、その後転職して病院のソーシャルワーカーとして働くことになり、やどかりの里創設に関わることになったのです。

私も側面から応援することになり、やどかりの里の役員をしたり他の組織との交流会の手伝いやボランティア育成に関わったりしていました」

「やどかりの里を残したい」

やどかりの里の活動が公的に認められるまで、約20年を要しました。そのため一時は財政難で、存続の危機にあったのです。

「やどかりの里が潰れそうになり、寄付集めも容易でない。その中で、障害のある当事者が自分たちの顔を出してもいい、やどかりの里を残したいと街頭募金に立ったことは印象深く、ひじょうに勇気をもらいました。その努力がやどかりの里の活動の大きな力になったと思います。

今ではやどかりの里は、地域に密着した生活支援を実践しています。ただ、彼らの趣味や、もっといろいろなことをやってみたいというニーズに応じていかなくてはいけない。そこで初めて対等な関係に立てるので、当事者が『自分は生ききった』

『こんなに幸せな毎日ではなかった』と言えるぐらい、考えていくべきことはたくさんあると思っています」

1人1人の力が大きな力に

最後に、これからのやどかりの里へのエールを伺いました。

「私たちが『障害者』という枠の中でものを捉えていないか、常に点検することが必要です。例えば何か事業を展開する時、障害者だからではなく、一般の人と同じように、それを当たり前のこととして考える。それを社会に認めてもらえるように、実践の中で確認をしていくことが必要だと思います。それには他法人や他団体に働きかけたり、行政や企業など仲間を増やしていく努力も必要です。

そして既成概念で物事を考えず、常に多角的な視点で見つめること。みんな違った個性をもっていて、その力を合わせれば大きなことが成し遂げられる。それぞれのもつ力を常に活かせるような、新鮮な状態で毎日が過ごせる組織をつくるのが大事だと思います」

土橋さんの中にある福祉の原点、そして未来のやどかりの里へのエールを胸に受けとめた時間でした。

(聞き手、萩崎千鶴・伊藤侑矢)

あの街
この街

俊一郎が行く・8

熱狂する心

感動はモノレールを降りた時から

伊丹空港からだとも目的の場所は近い。空港直結のモノレールに乗り数駅、改札を抜けるとすぐに見えてくる大きく弧を描くスロープ、高速道路の上にかかる橋、その先の森の中に見えるのが有名な「太陽の塔」。目的地の万博記念公園を訪れる前に、駅から望む計画都市の風景に既に感動している私です。



父が若者だった EXPO'70

大阪万博は、当時の芸術家や建築家など各分野のスターが一同に会して構成を考え、当時最高の技術をもって具現化したイベントでした。参加国も、自国のアイデンティティをパビリオンという建築で表現しており、別名「建築のオリンピック」といわれます。当時、建築の学生だった父は、そのパビリオンの設営に研究室として関わった経験を熱心によく聞かせてくれました。しかし、ほとんどの建物が現存しておらず、写真で見る多くの建物は色彩も形も今では時代遅れなものに見え、万博記念公園へは行くことがなく過ごしていました。

太陽の塔、そして記念館へ

岡本太郎の作品「太陽の塔」の脇を進み、記念館である旧鉄鋼館へ向かいます。太陽の塔の金色に輝く顔の部分は、どこか吐息をはいているような疲れた顔に見えました。そして万博当時の資料を展示する記念館へ向かいます。

記念館の入口は吹抜けのホールになっていて、外に面した部分は鉄とガラスの壁が連続していました。古びているけれど、工業化しきれていない時代の手づくりな印象がむしろ好ましい。更に進むと往時の万博公園の全体像を表した

とまつりしゅんいちろう
都祭俊一郎

1975年生まれ。生まれも育ちも、東京の下町。
エンジュの新築の他、保育園や幼稚園の設計（新築及び改修）
を複数行う。（写真 新 良太）



模型が展示され、映画で見る未来都市の風景のようでした。

歓喜の様子

2010（平成22）年に改装された記念館の展示室は、いきなり始まる朱色の空間とそこに浮かぶ万博のロゴが鮮烈で、高揚感が湧いてきます。展示内容はどれも見応え十分。この万博がどれほど多くの人に支持され、好奇心を掻き立てていたのか、館内に大音響で流れる前衛音楽とともに伝わってきます。



展示の途中、建物中心部分に設けられたホールで足が止まりました。それは「スペースシアター」といわれる当時のイベントホールの保存展示で、入ることはできませんが音響演出や照明演出を当時のままに体感できるようになっていて、会場内を包む熱狂が、効果音として流される歓声とともに迫ってきます。

熱狂する心

圧倒的な雰囲気になまれ、ふらふらになって記念館を後にしつつ今の時代を考えてみました。テクノロジーは既に人の限界を超え、当時夢だった生活は既に当たり前のものになっているかもしれない。しかし、本当に大事なものは全ての人と分かち合える熱狂なのかもしれません。折しも東京オリンピックまであわずか。経済も社会も、そして福祉においても様々な価値観が生まれ、ますます世の中は多様化し複雑化しています。国立競技場の諸問題もしかり。でもいちばん大事なことは、人々がこのイベントを共通の熱狂をもって迎えられ、そんな妄想とともに帰路についた旅でした。

インフォメーション

喫茶 味ズ



営業時間 月～土 10.00-17.00
さいたま市大宮区天沼町 1-136-2

募集

- ☆作品展示したい方
- ☆雑貨販売したい方
- ☆貸しスペースあります

詳細は ☎ 048-657-0202

天沼1丁目
大宮駅 喫茶味ズ
スーパーバリュー
○大宮天沼店

埼玉県産小麦粉を使用 手づくりまんじゅう

まごころ



さいたま市中央区本町東 5-9-7
Tel. 048-857-2783 Fax. 048-857-2769

**YUM! YUM!
YUMMY!!**
<http://www.yadokarininosato.org>

世界中のテーマパークで愛されている
Gold Medal 社製
POPCORN

あなたの街のイベントやお祭りに呼んでください! 出張します!

<http://www.yadokarininosato.org/>

公益
社団法人 やどかりの里 (さいたま市見沼区染谷 1177-4 やどかり情報館)
Phone. 048-680-1893 Fax. 048-680-1894
e-mail : print@yadokarininosato.org

おいしく食べて
健やかに
栄養バランスのとれた
お弁当で食生活を変えよう

昼食 1食 550円

月～金、1食からお届けします!

- *お好みや刻み食も対応します
- *ご希望の曜日にお届けします

エンジュ TEL 686-7875

<受付> 月～金 (祝日を除く) 8:30～18:00

インフォメーションコーナーの
掲載広告を募集しています!

1マス (64mm * 46mm) 5,000円



事務用封筒・名刺・軽オフ印刷のことなら

あなたの街の印刷屋さん

やどかり印刷

Tel 048-680-1893 Fax 048-680-1894
さいたま市見沼区染谷 1177-4

こころの悩み、ちょっと話してみませんか…?



お住まいの区の障害者生活支援センターまでご連絡下さい



見沼区障害者生活支援センターやどかり 電話；048-682-1101
大宮区障害者生活支援センターやどかり 電話；048-795-4720
浦和区障害者生活支援センターやどかり 電話；048-793-6373

～精神障害のある方、そのご家族の地域の相談機関です～



エプロン



学校グッズ



防災ずきん

公益社団法人 やどかりの里

すてあーず

南中野 844-22 イエローハウス
Tel/688-8223

布製品をオーダーメイド製作いたします!

お気軽にご相談ください。

1F リサイクルショップ「すてあーず」営業中!

Tel/687-4483 (直)



書籍案内 やどかり出版 〒337-0026 埼玉県さいたま市見沼区染谷 1177-4 TEL 048-680-1891

やどかりの里 45 周年記念出版



障害者権利条約と
やどかりの里

やどかりの里 45 周年
記念出版編集委員会 編

2015 年 6 月 定価 1,728 円

JD ブックレット 3



「生き場」をなくした人たち
罪を犯した障害者の生きにくさに向き合う

赤平 守 編著者
日本障害者協議会 編者

2015 年 7 月 定価 1,000 円

大宮見沼 よみさんぽ

作者紹介

写真家 野口勝宏さん

のぐちかつひろ／写真家、福島県在住。
「福島の花の美しさで世界の人々を笑顔にしたい」と「福島の花」シリーズを制作。開催中の福島県観光キャンペーン「福が満開、福のしま」においては前年に続いてJR東日本のメインイメージに起用され、ポスターや駅構内装飾・ラッピング車両を花で彩る。福島空港においてもANA全日空カウンターや搭乗橋、到着ロビーを花の写真作品で彩っている。著書に「ここは花の島」などがある。Nikon Photo Contest 2014-2015写真部門では、グランプリを受賞。「福島の花」シリーズは<http://noguchi.jpn.com>にて閲覧可能。Facebookは「福島の花」「野口勝宏」で公開中。

表紙：アサガオ ワレモコウ

花が風に吹かれ自由に揺れる姿はとても心地よい。花は何も語らない。私たちが感じるもの。言葉では語りつくせない花の心地よさをこの福島の地から伝えていきたい。

題字 宗野文さん

学生時代から書道が大好きで、子育て中の今、我が子とともに習字に再挑戦中。やどかりの里の作業所「すてあーず」所長。見沼区南中丸在住。

大宮見沼よみさんぽ 第14号

発行 2015年7月（夏号）

編集 「大宮見沼よみさんぽ」編集委員会
〒337-0026 さいたま市見沼区染谷
1177-4

Tel 048-680-1891

Fax 048-680-1894

E-Mail johokan@yadokarinosato.org

<http://www.yadokarinosato.org/>

発行 公益社団法人やどかりの里

理事長 土橋敏孝

印刷所 やどかり印刷

公益社団法人やどかりの里は、この大宮見沼界隈で障害のある人たちとともに地域で生きることを目指して活動を続けています。私たちは長年この地域で活動し、地域の皆さんに支えていただけてきました。

そして、この地域の人々が織りなしてきた歴史・文化、守り育ててきた自然、地域に根づいた事業等々をもっと知りたいと思うようになりました。合わせて、やどかりの里のことも皆さんにもっともっと知っていただきたいと「大宮見沼よみさんぽ」を創刊いたしました。

「大宮見沼よみさんぽ」編集委員一同